

食品製造・卸売業

有限会社 勝又製茶

富士山の裾野で314年間、製茶業を営む勝又製茶。勝又共社長は新商品を開発して、昨年から営業力のあるパキスタン人のビジネスパートナーと共に、海外展開に乗り出した。

▶CHALLENGE!
富士山ブランドの日本茶で勝負

▶進出先
ベトナム



- 会社概要
- 所在地: 静岡県御殿場市
 - 業種: 製茶製造・卸売業
 - 資本金: 1,000万円
 - 創業: 1701年 ●従業員数: 4人

安心、安全な日本茶は信頼のブランド茶
314年の歴史と共に世界へ



富士山のふもとに広がる茶畑

Step-1
なぜ海外展開に至ったか？
富士山麓のお茶は
メイドインジャパンの象徴となる

静岡県は日本一のお茶の産地である。そのシェアは全国の約4割を占める。しかし、静岡県は広く、県の西部、東部、中部ごとに茶摘みの時期から茶の特徴までさまざまな違いがある。

同社は、1701年から静岡県東部の富士山のふもとで製茶業を営み、勝又社長は18代目茂右之門を襲名している。しかし、ここ10数年、需要の減少により、お茶業界に陰りが見え始めてきた。さらに東日本大震災の影響で、同社のお茶の販売量はピーク時の3分の1に落ち込んだ。

勝又共社長は言う。

「東日本大震災以前から、特に若い人はペットボトルのお茶を飲んで、自宅で急須で入れたお茶を飲まなくなり、国内販売は頭打ちの状態でした。しかし、長年営んできたお茶作りの伝統をなくすわけにはい



創業時代から続く有機栽培の茶葉

静岡県茶手揉技術競技大会で煎茶本来の製法を競う



きません。そこで思いついたのが、ここが富士山のふもとであり、また、その富士山は日本を象徴するアイコンであることです。ここで摘んだお茶はジャパンブランドとして、海外でも十分通用すると思ったのです」。

Step-2
海外展開の準備
海外展開を現実的にした
ビジネスパートナーとの出会い

輸出を考えたときに、商社と関わるのは避けたいと思った。ブランディングやマーケティングなどを商社に任せると、同社の主張が通らず、利益も薄くなるのでは、と考えたからだ。そこで勝又社長は、同社のお茶をPRしてくれる「人」を探し、活用することにした。

まず、勝又社長のベトナム人の友人に依頼して、ベトナム人の友人を通じて、同社のお茶の評判がSNSや口コミで少しずつ広がり始めた。これにより、ギフト用として、継続して輸出できるまで成長。また、ベトナムでマーケティングの仕事をしてきたパキスタン人のビラル氏が、同社のお茶作りに大きな感銘を受け来日し、日本茶を輸出する会社を設立した。ビラル氏は今、静岡県東部のお茶の輸出に取組んでいる。

ビラル氏は言う。

「日本人はビジネスパートナーとして、信頼感があります。メイドインジャパンの商品も、安心、安全のイメージがあります。日本茶は成人病の予防や美容にも効果があると言われており、中東の人たちも注目しています。しかも富士山のふもとの茶畑から、直接輸入するお茶であれば、付加価値は高いです」。

Step-3
海外展開スタート
中国茶や紅茶に品質で負けない日本茶
現地の人の高評価が進出の鍵



有機栽培の日本茶を世界へ

勝又社長は、ビジネスパートナーであるビラル氏と連携し、アジア、中東を中心に販路を拡大する。ビラル氏の実兄がUAE(アラブ首長国連邦)で建設業を営んでおり、ドバイにも足を運んで感触を窺った。

「中東やアジアには、安価な中国茶や紅茶が入っています。これらの地域で高価な日本茶を買ってもらうには、

ホーチミンにある日本茶取扱店

富士山ブランドがあると大きなインパクトを与えます。現地では、できるだけ現地の消費者からニーズを聞き、マーケティングを行い、ジャパンブランドの評価を高める必要があります。

同社の売上のうち、輸出は約30%を占めるまで成長。主な輸出先は、ベトナムやメキシコとなっている。

Step-4
今後の展望
茶室でいただく抹茶はクール
茶の湯の文化を世界に伝えたい

日本茶の中でも深蒸し茶は、日本人にとっては味わい深い、外国人にとってはなじみがやすい。輸出の中心となるのは抹茶である。

「私は、抹茶を点てる文化そのものを輸出したいと考えているんです。最初は外国人にも受け入れやすいお茶から入って、



国によって味の好みも異なる



だんだんと本当の日本茶の美味しさを伝えたいですね。UAEにいるビラル氏のお兄さんとは、ドバイに茶室のある家を建てたら、日本文化そのものを輸出できるのではないかと話しています」と勝又社長。

同社の海外展開にとって、日本茶は「はじめの一步」に過ぎないのだ。



ドバイへの輸出も目指す(ドバイ:ブルジュ・ハリファ)

Interview
我が社の「イズム」
300年前から先進的
グリーンティーはクールジャパンの代表格



勝又 共生氏
有限会社勝又製茶
代表取締役

日本のお茶が評価されるのは、その安全性です。勝又製茶の茶畑は、元禄時代からずっと有機栽培を続けてきました。しかも日本茶は、日本独自の製法で作られた先進的なお茶です。世界には中国茶や紅茶など、種々のお茶がありますが、日本茶はまさにクールで特別なのです。静岡茶を300年以上前から作り続けている人には、品質のいいお茶を、将来にわたって作り続けていきたいという思いがあります。そのためには、農家だけでなく、様々な業種が協力しあって海外に挑戦する必要があります。私が目指すのは、お茶の総合商社ではなく「農社」なのです。